CONTENTS

002　地域に応えたい
004　IPUの地域連携体制
006　岩手の明日を担う、実学・実践重視のプロジェクト研究
007　開学10周年記念研究成果発表会
008　情熱と希望よ、舞いあがれ
010　看護技術の根拠と効果及び安全な技術に関する実証的研究
016　岩手県におけるユニバーサルデザインに関する研究 ― 岩手における普及と実践
022　赤外線瞬時通信及び次世代展示案内システムの研究開発
028　郷土芸能伝承のためのコンテンツ作成技術に関する研究
034　都市農村交流による地域活性化方策に関する研究
040　魚介類等地場産食材を利用した介護予防食品の開発
046　付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造 ― 地域言語学の世界
052　テラヘルツイメージングによる非破壊検査応用
058　編集後記

写真／銀河へ架かる岩根橋
遠野市宮守町下宮守にあるこの橋は、正式には達曽部（たっそべ）川橋梁という。旧岩手軽便鉄道の鋼板桁橋、橋台、橋脚をそのまま鉄筋コンクリートで包み込んで改修した6連の美しいカテナリーアーチ橋。現在もJR釜石線が走る現役の橋として使用されている。長さ98.5m、川面からの高さ17m。1943年（昭和18年）竣工、2002年（平成14年）には土木学会選奨土木遺産に指定。宮守町には宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』のモチーフになったといわれる有名な「めがね橋」（宮守川橋梁・土木遺産指定）があるが、実際のモチーフはこの岩根橋だったとする説もある。

いるのである。

世界がグローバル化へと進む時代にあっては、それぞれの研究領域において、こうした視点と発想がなければ、本当の意味での地域貢献も教育・研究活動も成り立たなくなったといっても過言ではないだろう。地域化と国際化は二律背反ではないのだ。

敬愛する2人の先人がいる。1人は、大学入試の面接官に「私は太平洋の橋になりたい」と言った新渡戸稲造である。もう1人は、イギリスの経済学者アルフレッド・マーシャル。彼は、「Coolhead and Warmheart（冷静な頭脳と温かい心）」を持てと言った。学びを究め専門を拓かんと未知の世界へ歩みを進める人びとにとって、欠くことのできない指針がここにある。学ぶべきは、初志を貫く堅固な意思であり、学問に臨む姿勢である。それは、岩手県立大学において、教員と学生とが共有すべき学びの姿勢でもあると思う。

本誌には、未知なる世界に挑み、岩手の大地に確かな歩みを刻む研究者たちの姿が凝縮されている。本学の研究とその成果は、日々に新たなステップへと歩みを進めている。その意味において、本誌に掲載された先進研究は、本学の教育・研究成果の一端である。

願わくは、本誌を通し岩手県立大学で行われている研究に触れ、高潔な精神と緻密な研究の営為、そしてその成果とはいかなるものかを知り、感じていただきたい。例えば地域の諸課題に取り組み解決の方策を提示する研究、あるいは世界先進の技術を生み出す研究、そうした成果を上げつつある研究者たちが確かにここにいるという事実とともに。

本学の教育・研究が、岩手という大地にしっかりと根付き、岩手発の世界的な研究へと発展することを願ってやまない。本学で学び育まれた優れた人材が、やがて世界の舞台に立つ日を夢見ている。それは、もはやそう遠い日のことではないと思っている。